

ろうとLGBTQの交差から「多様性」を考える

山<sup>やま</sup>  
本<sup>もと</sup>  
芙由美<sup>ふゆみ</sup>



## プロフィール

兵庫教育大学大学院博士前期課程修了。日本財団の支援を得て、二〇一五―二〇一七年ギャロドット大学（米国）でろうLGBTQ字を専攻。現在「ろう×LGBTQサポートブック」の発行や講演、原稿執筆、ろうセクシャルマイノリティ全国大会（五回大会まで）や東南アジアろうLGBTQ会議の運営等、幅広く活動。

○司会 皆さん、こんにちは。それでは、定刻となりましたので、ただいまより二〇二四年度講座「生きること」の第一回目を開催いたします。

それでは、講演を始める前に、本日お話しいただきます山本芙由美さんのプロフィールを簡単にご紹介させていただきます。山本芙由美さんは、兵庫教育大学院博士前期課程修了後、日本財団の支援を得て、二〇一五年から二〇一七年まで、アメリカに留学され、ギャロレット大学でろうLGBTQ学を専攻されました。現在は、ろうLGBTQを支援する団体「Deaf LGBTQ Center」の代表を務められ、ろうLGBTQサポートブックの発行や講演、原稿執筆、ろうセクシュアルマイノリティ全国大会や東南アジアろうLGBTQ会議の運営など、幅広く活躍されております。

なお、先生は手話でお話されます。客席に座っている手話通訳士が手話を読み取り、マイクで皆様にお話していただく流れで進めますので、よろしくお願いいたします。

それでは、講師の山本芙由美さんにご講演いただきたいと思います。拍手をお願いいたします。

(拍手)

○山本 芙由美 皆様、こんにちは。拍手をしてくださいましたよね。手をたたいて拍手される方、ろう流の拍手をされる方、いらっしやると思えます。私は拍手の音が聞こえないので、手をひらひらさせて合図します。私たちはこのようなことを「サインウェーブ」と呼んでいます。今

日は一時間半ほどのお話です。難しくはありませんし、入門的な内容です。LGBTQとは何か、それを手話でお話したいと思えますので、どうぞよろしくお願いいたします。

改めて、先ほど、ご紹介いただきましたけれども、私は山本芙由美と申します。手話で「芙由美」は「寒い」という手話表現になっています。漢字は違いますが「ふゆ」というだけで、手話ネームが決まってしまうました。手話ネームはその人の特徴をとらえたものが多いです。例えば、くせ毛の人だと手を頭の上にあげて波線を表したり、メガネをかけている人は「メガネ」を表したりします。そのようなことがろう者の文化、ろうコミュニティにはよくあることなんですね。

今日のお話の内容は、ろうLGBTQ+についてです。最近「LGBTQ」という文字を見かける機会が増えておられるのではないかなと思います。新聞であったりとかテレビであったりとか見る機会が増えましたよね。「LGBTQ」という言葉をご存じの方、手を挙げていただけますか。

たくさんいらっしゃいますね。多分、三分の二ぐらいの方がご存じかと思えます。LGBTQを知っている方で、さらに意味を知っている方、手を挙げてください。

ありがとうございます。三分の一ぐらいでしょうか。LGBTQという意味を知らない方がたくさんいらっしゃると思います。今日はLGBTQ、一つ一つ丁寧にそれぞれの立場をご説明させていただきます。と思っています。

「Q+」とありますね、気づいておられますか。「+」が入っています。聞いたことない方、「+」はどういう意味なのか。実際、LGBTQには、まだまだ続きがあります。この「Q+」の続きには、全部で三十種類ぐらいあります。それぐらい性というのは本当に多様です。この「+」というところにそういう意味が含まれているということです。LGBTQの中にも、ろう者、耳の聞こえない方もいらっしゃいます。また、LGBTQの中にも目の見えない方もいらっしゃいます。車椅子の方も当然いらっしゃいます。LGBTQのろう者ということで、私の立場から、今日は当事者としてお話をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。先ほども、私の紹介もしていただいたので省こうかちょっと悩みますけれども、私は、両親もろう者です。両親の第一言語は手話です。両親の手話を見て育ちましたので、私自身も手話が第一言語です。私が初めて覚えた手話を母が教えてくれました。コーラの瓶にある栓を抜く表現をしたそうです。「コーラ、ちょうだい」という表現が私の初めて表した手話です。普通だったら「ママ」とか「パパ」とかを先に覚えて表したりするのだと思いますが、私は「コーラ」だったそうです。

三歳頃から日本語の読み書きを始めました。

私の生まれは京都です。枚方から近いですね、一時間ぐらいで行けます。今は神戸市に住んで放課後等デイサービスの管理者をしております。ろうの子どもたちを受け入れて宿題の見守りをしたり、一緒に遊んだり、手話を教えたり、そういう放課後等デイサービスの仕事をしており、

現在、四年目になります。送迎やスタッフからの愚痴とかも聞きますし、幅広くいろいろなことをします。

ろう児たちはろう学校に行っている方が多いです。「制服でスカートは嫌やわ」とか、「私決めれないわ」という子どもたちも最近はどんどん増えていきます。学校の場合は「女子、男子」と分けますよね。どっちかに決めなさいと言われますよね。例えば、赤色と黒色、ランドセルの色も分けられますよね。最近は色の種類も増えてきて、選べるようになりましたね。トイレとかもそうですよね。子どもたちは「どっちがいいんだろう」と迷います。そういうふうに迷っている子どもたちがたくさんいます。そういう経験を含めてお話したいと思っております。

私は二〇一五年、兵庫教育大学大学院を卒業いたしました。ろう教育を専門に学びました。また、ずっと自分の性に対して、好きな相手は男性なのか女性なのか決めることが難しかったです。ずっと揺れていました。そして、大学に入った後に初めて好きな女性ができました。その方と交際をしました。自分は今も性指向で揺れています。私はレズビアンなのだろうか、いや違う、というように揺れています。多分、一生、揺れ続けるのだろうと思います。私自身の現在の性指向はパンセクシュアルです。手話ではこのように表します。意味については後でまた詳しく説明させていただきます。

大学を卒業した後、同じくろうのパートナーがいたんですけど、元は女性でした。彼が男性に性転換したいということで、性別適合手術を受けました。私たちは耳が聞こえないので、病院に

行くときも手話通訳が必要です。十五年前は、LGBTQの専門的知識を持った手話通訳がなくて断られてしまうこともありました。今はもう大分変わりましたけど、でも、理解がまだまだ得られていません。ろう者で集まりがありますけれども、侮蔑的な手話がたくさんありました。飲み会の場でも「ああ、あの、ホモね」とか「レズね」とか、そういう侮蔑的な手話を使う場面があり、私はそれを見るとすごく嫌な気持ちになりました。ろうコミュニティでも、差別があります。ろうコミュニティに多様な性を伝えるためにはどうしたらいいか、そんなことを考えるうちに私はもっと勉強がしたいと思いました。それでアメリカに行こうと決めました、それが三十三歳の時でした。

アメリカに行く前は、銀行員だったんです。お堅い仕事ですよ。日本財団に行き、ろうのための海外留学奨学金事業に応募しました。内定をいただいて、アメリカで二年間勉強しまして、そのときの写真がこちらになります。

（留学当時の写真の映像）

ギャロデット大学は、皆さんご存じでしょうか。世界のろうコミュニティで有名な大学です。世界で一つだけ、ろう者・難聴者のための総合大学です。二〇一五年ぐらいからそこに通いました。ろう者学とか、手話言語学とか、ろうLGBTQ学とか、ろうに関するそれぞれの分野で専門的に勉強ができる大学です。複合マイノリティについても学ぶことができます。今から十年前の話です。十年前と言えばLGBTQという言葉は日本にはまだ広まっていませんでした。

今みたいに普及はされてなかったんです。カミングアウトも無理、孤立されている方がたくさんいらっしゃったんです。ろうLGBTQの活動もほとんどありませんでした。アメリカ留学することで、多くのろうLGBTQと交流したり、リーダーの方にも会いました。

（大学の授業風景の映像）こちらが授業の雰囲気です。

ろう者は分かると思いますが、こんなふうには円形に座って話します。そうすると教員の手話が見やすいので、どこからでも手話が見える位置に座る形で学習します。そのようなことをデフ・スペース・デザインといいます。映像の右上にいるのはギャロドット大学の学長さんです。これまでずっと男性が学長をされていましたが、この方が初の女性学長です。しかもレズビアンの方です。映像の左側にいらっしゃる方がその方の同性の妻です。

（大学の卒業式の映像）

ギャロドット大学の卒業式などの公的な場にも、必ず妻と同行されています。ギャロドット大学の卒業式には、LGBTQの人たちだけではなくていろいろな方が参加されています。わざわざLGBTQの卒業式をするのはなぜだと思いますか。それは家族にカミングアウトできない学生がたくさんいるからです。トランスジェンダーの場合、呼ばれたい名前でもらえないとか、例えば、身体は女性で心が男性の立場で、本当の卒業式ときには家族が来るのでその女性の名前を呼ばれますよね。そのときはすごく我慢しています。男性の立場で男性の名前を呼ばれたいという気持ちがあって、本当の卒業式的时候は仕方なく参加するけれども、LGBTQ

の卒業式では男性の名前で呼ばれることができません。その卒業式の写真の中に私がいますね。

情報提供ですが、ユーチューブや、ネットフリックスでギャロデット大学の学生生活を映したドキュメンタリー映画が観られます。もしよろしければまた観てください。

改めて話を戻しまして、今、行政等からも「ダイバーシティ」という、言葉を聞く機会が増えてきていると思います。ダイバーシティというのは障害や価値観、国籍、ルーツ、性別、ジェンダーなど、多様な背景や特性を持つ個人が存在する状態をいいます。セクシャリティも含まれています。それらのアイデンティティをグループ化したのがダイバーシティ、多様性と言います。日本の場合には多様性といってもピンとこない、実感がないかと思えます。私もそうでした。日本にいるときは「多様性って何だろう」という感じで、実感がなかったです。でも、アメリカに留学して初めてよく分かりました。アメリカの場合は、髪の色、目の色、肌の色、本当に多様な方がいらっしやいます。見ていてわかります。言語も違いますし、英語、フランス語、イタリア語など、様々です。手話もアメリカ手話、フランス手話、イタリア手話、日本手話、いろいろな国の手話をされています。可視化、見える化されています。でも、日本人はほとんど髪は黒色だし、目も同じ黒色だし、大体、日本語をしゃべっているため、日本にいると違いが見えないです。同調圧力というものが起きています。違うからということ疎外することもあります。無知が差別につながることもあります。多様性をどんなふうに理解していくかが、日本の今後の課題かなと思います。

そこで、センターでは違いを可視化させるための、知るためのワークショップもしています。突然ですが、クイズをさせていただきます。皆さんセクシュアリティについてどれくらい分かっているかなということで、日常生活の中で性は深く関わりはありますけれども、ちょっと考えていただきたいと思います。全部で十個ぐらいのクイズをさせていただきます。質問するので、合っていると思われるら手を挙げてください。違うなと思ったら手を挙げないでください。

まず、質問一、「女性は必ず男性を好きになる」と思う人、手を挙げてください。遠慮なく手を挙げてください。女性は必ず男性を好きになると思う人もいる、思わない人もいる、いろいろといらっしゃいますよね。この答えは「違います」、「ノー」です。女性を好きな女性もいますし、男性を好きな男性もいますし、本当に様々な形があります。今、社会の中で、男性と女性が結ばれるのは当たり前という考え方があります。異性愛が当たり前という考え方があります。が、実は女性同士、男性同士、恋愛しない人もさまざま。しかし、それがなかなかカミングアウトできない状況があります。最近では、テレビの世界で取り上げることが増えてきました。男性同士が、内野聖陽さんと西島秀俊さんが出演されている、男性カップルが同棲している家で御飯を作るドラマです。「きのう何食べた？」というタイトルの面白いドラマがありましたね。

質問二、「全てのゲイは、おねえ言葉で話すのが当たり前」と思っている人。ゼロですね。いらっしゃらない。はい。おねえ言葉で話す方もいらっしゃいますが、普通にしゃべる方もいらっしゃいます。いろいろです。テレビで言うと、ゲイと言えばおねえ言葉をしゃべるという固定概

念がありますね。でも、そんなことはありません。

質問三、「心の性と体の性が違う人がいる」。どうでしょうか。たくさんいらっしゃいますね。当ててもいいでしょうか。手を挙げた方、質問してもよろしいでしょうか。その人に対する呼び方をご存じですか。

○回答者A トランスジェンダー。

○山本 美由美 はい、そうです。正解です。ありがとうございます。

トランスジェンダーという手話はこのように表します。女性から男性になる方、男性から女性になる方のことをトランスジェンダーと呼びます。中にはわざわざ性別を変えていなくて、私は男性かな、女性かな、どっちかなと、揺れている人もいます。なのでトランスジェンダーというのはすごく幅が広い概念です。手術を受ける人もいれば受けない人もいます。医学的な用語では性同一性障害といえます。手話はこのように表します。最近はあまり使わなくなりましたが。当事者はその言葉は使わずトランスジェンダーと言うことが多いです。裁判所等に提出したりするための診断書をつくるために、性同一性障害という言葉が必要なんです。

次、四番目、「同性愛を犯罪と考えている国はない」。正しいでしょうか。

皆さん、どこの国がそうだかご存じですか。「アジアかな」とおっしゃっています。アジアに、同性愛者が犯罪と言われている国があるのかなと。

(世界地図の映像)

地図上の青いところは同性婚が認められている国です。アメリカやヨーロッパ、オーストラリアなどは認められています。黄色いところは、ロシアや一部のアジアは黄色ですが、それは犯罪ではないですが、差別禁止法がないなど法的保障がないところです。赤いところ、中東地域の国はLGBTQだと知られると犯罪になってしまいます。強制労働十五年以上の罪、家族にも会えないという厳しい犯罪になってしまいます。宗教がイスラム教なので、同性婚は神に対する冒瀆だということになって犯罪扱いになっています。さらに、茶色いところ、イラン、イラク、アフガニスタン、パキスタンとかイエメンなどの国の場合は死刑です。同性愛者と分かったら死刑になります。それが今の世界のLGBTQに対する状況です。日本の場合はグレーです。グレーのところ、法律は同性愛を守る法律はありますがけれども中身がない状態です。ですので、そのようなことを知るのLGBTQにとっては大切なことですよね。これから旅行に行ったりするときにきちんと把握しなければなりません。同性婚で行って手をつないで歩いていたら、イラン等の国では死刑になってしまいます。そういうことがありますので、海外へ行く前にはきっちり下調べをして、その後に海外旅行に行かなければいけません。

五番です。「同性を好きな人は病院で異性を好きになるように治さなければならぬ。診断が必要だ」。これはマルでしょうか。

そうですね。皆さん納得できない顔ですよね。そうです。間違いです。実際に一九九五年頃は、同性愛は病気と言われていました。厚生労働省から、うつ病であったり統合失調症といった

精神疾患の中に、同性愛は入っていました。病気という考え方がずっとありました。薬を飲みなさいとか入院しなさいとか、そういうことがありました。今はそういうことはありません。LGBTQは権利です。今も、同性愛は病気と考える方がまだまだたくさんいらっしゃいます。特にSNSであったりとか、Xやフェイスブックでも、やはり同性愛は病気だという内容の投稿が多いですよ。まだまだそういう考え方が根強く残っています。

質問ですけれども、異性愛という言葉をご存じの方、いらっしゃいますか。ご存じないですか。あ、いらっしゃいますね。これを話に出したのは、そういう言葉もある、異性愛という言葉もあるということを知っていたからです。同性愛が特別ではない、そういう言葉もあるということをご皆さんに知っていただきたいです。覚えてください。

質問七です。「LGBTQであることが分かると就職ができない」ということ。手を挙げる方、いらっしゃらないですね。皆さんすばらしいですね。これは間違いです。今、やっとLGBTQ+を理解してくださる企業がどんどん増えていきます。特に大手企業では、理解が進んでいると思います。中小企業はまだ理解が進んでいないと思います。実際にLGBTQ+の方が仕事で就職できないことはないですけれども、就職活動中にはやはり大変な状況があります。履歴書です。就職するために皆さん、自分の写真を付けた履歴書に学歴であったり職歴であったり書いて面接に行きますよね。履歴書を書くときに女性、男性という欄がありますね。LGBTQは特に、トランスジェンダーの方はやはり困ってしまいます。私は、男性、女性、どっちなのだと

うって思います。就職するのがしんどい。そういう方がたくさんいらっしゃいます。自分がトランスジェンダーだと見られたら、何か嫌な顔をされる、面接に行きにくいという状況もあります。最近ではLGBTQのための求人募集とかそういうのもどんどん増えております。以前と比べたら就職はしやすくなっていると思います。まだまだですが。

別の話になりますが、私の友人でトランスジェンダーの方がいますが、就職、なかなか難しかったのですが、無事に決まりました。「どうだったの」と聞いたら、履歴書のところの性別欄にマルをするところがありますよね。友人は身体が男性で、心は女性です。今までは正直に男性と書いてしまい、見た目のギャップで面接に落ちてしまいました。「ん、履歴書では男性なのに女性が来た」とか、女性と書いているのを見た目が男性の方が面接に来たとか思われてしまったのです。そのような中で友人は試しに「男・女」の点のところにマルを書いてみたら受け取りました。そういう例もあります。企業によってはいろいろですよね。「面白い発想だな、採用してみよう」という例もあります。慣例ではなく、新しいことにチャレンジすることで変わることもあります。

質問八です。「人はみんな誰かに恋愛感情を持つ」と思われている方、手を挙げてください。多いですね。そうですね。ほとんどの方はそう思われていることでしょう。しかし実際は人に対してどきどきするとか好きとか、そういう感情がない方もいらっしゃいます。LGBTQ+の、+の中に含まれております。

続きにLGBTQIAというのがあります、ア・セクシュアルという方もいらっしゃいます。

その方は恋愛感情があまりありません。例えば、女子トークの中で恋バナというのがありますね。「彼がいるの」とか「どうなの」とか、いろいろと話に花が咲きますよね。ア・セクシュアルの方は恋愛感情がないので話に入れないです。恋愛を前提とした話の中に入らず孤立を感じてしまうこともあります。

質問八は間違いになります。そういう方もいらっしゃるということを皆さんに知っていただきたいです。

質問九です。「LGBTQは家族を持ってない、子どもをつくれな」と思われる方、できると思う方は手を挙げてください。(参加者挙手) 質問いいですか。できると思われる理由はどうでしょうか。

○回答者B 例えば、女性と女性のカップルの場合、精子を提供していただいて子どもを産むとか、養子縁組をするとか、いろいろと方法があると。

○山本 美由美 そうですよ。ありがとうございます。ほか、ご存じの方とかいらっしゃいますか。ほかの方、いましたとか聞いたとかそういう例をご存じの方、いらっしゃいませんか。

先ほどの方、そうです。一つの例になると思います。例えば、ゲイ同士で代理母、代理の方に自分がお金を払って出産をお願いする。自分の精子を提供し、人工授精の後、妊娠、その子どもをもらうという例もあります。ほか、いろいろとありますけれども、例えば、女性同士の場

合は第三者から精子提供していただいて産むという例もあります。いろいろな例、工夫、選択があります。私の友達でゲイのカップルがいますが、四年前に大阪市で里親登録を申請しました。仕事、所得はどうなのかとか、育てることができるのかなど、厳しい審査がありますが、パスして、子どもを育てています。LGBTQでも家族を持てます。子どもをもつ方法、つくる方法もあります。ですが、自民党のある議員さんが、「LGBTQは生産性がない。子どもを産めない。だから意味がない」というような、存在価値がないということを言っていました。そういう価値観が日本にはまだあります。日本も今、少子化で、国も困っていますよね。どうすればいいのか。最近の子育てでいろいろと支援されているかと思えますけれども、LGBTQの方たちの中にも、子どもが欲しいと考える方がたくさんいらっしゃいます。そういう方々に支援するのきと子どもが増えると思えます。そのような視点も大事なことだと思います。

もう一つ、面白い話があります。アメリカに留学したときに、LGBTQの方がたくさんいらっしゃいました。留学したギャロレット大学でたくさんの方の先生にも会いました。大学の六十%の先生がLGBTQの方です。三十%が異性愛の方です。LGBTQがマイノリティである日本とは逆の割合ですよね。子どもを連れている同性カップルがたくさんいました。「どうやって子どもができたの」と聞いたら、アメリカの場合は、精子バンクというものがあります。精子バンク会社がすぐ競争化しています。カタログとか見ましたけれども、ものすごく面白いことが書いてありました。精子提供者の情報が書かれています。人種や目の色、髪の色、

仕事の内容など詳しく載っています。頭脳のIQなども載っています。IQが高ければ高いほど価格も高くなってしまいます。おかしい話ですけども、そういった精子バンクが流行っています。それでお金を払って子どもをつくるという選択がアメリカでは当たり前だということがあります。

話がそれてしまってますみません。最後、質問十、「人間の性はいろいろである」と思う方、手を挙げてください。はい、三分の二ぐらいかな。ありがとうございます。そうですね。いつも言っていることですが、人はみんな同じではないです。十人十色であるように、顔もふっくらした方、細い方、髪の毛の長い方、短い方等、本当にいろいろといらっしゃるように、性もいろいろな方がいらっしゃいます。

これで質問は終わります。

ちょっと休憩しましょうか。今から五分間休憩させていただきますので、二時五十分からもう一度お話させていただきます。

(休憩)

○山本 美由美 先ほどの続きです。それぞれ顔が違うように性もいろいろな形があります。例えば、性別にこだわらない人もいらっしゃいます。自分が女性で女性のが好きという方もいらっしゃるし、男性同士という方もいらっしゃいますし、自分の心と体が違う生き方を選ぶ人もいます。恋はしないという方もいらっしゃいますし、自分は男性と女性と分けたくないという方、揺

れていた方もいらっしゃるし、本当にいろいろな方がいらっしゃいます。みんな違ってみんないいということです。

先ほどLGBTQだけではなく、そのまま続いでいくので十と言いましたけれども、覚えなくてもいいのでこういう例があるということをご参考程度に聞いていただければと思います。

今から手話の勉強ということで、手話もちょっと覚えていただけたらと思います。まず、女性が好きで女性、レズビアンです。手話では「女性」を左胸の方にあてます。「男性」「女性」という手話表現があります。男性が好きで男性のことをゲイと言います。「男性」という手話を左胸のところにあててゲイと表します。女性も男性も好きという方、そういう方をバイセクシュアルと言います。手話は左胸のところに「男性」と「女性」と両方をあててバイセクシュアルと表します。女性も男性もトランスジェンダーも全ての性が好きな人をパンセクシュアルと言います。手話ではこんな感じですが。五本の指をパーにして表します。私の場合は、先ほども言いましたけれども、男性も女性もトランスジェンダーも全部含めて好き、好きな相手の性を選ばないでパンセクシュアルです。男性が好きで女性、女性が好きな男性、異性愛の方が社会では多数、マジョリテイです。それをストレートと言います。改めて説明すると、心の性と体の性が違う生き方をしている人、それを選んで生きる方をトランスジェンダーと言います。トランスジェンダーの反対ですが、例えば、女性の体で女性の気持ちといったように心と体が一致しているのがシスジェンダーです。シスジェンダーの方々が社会では多数、マジョリテイなんじゃない

かなと思います。

次に、自分の性を決められない方がいます。自分の性がどちらか、揺れたい人もいますけど、「私は男性、女性、トランスジェンダー、何だろう」と揺れたいという、そういう方を含めてクエスチョニングやクイアとかいうアイデンティティを使います。ノンバイナリーというアイデンティティも新しく出てきました。女性・男性という枠組みに入らない、入りたくない、こういう方も増えています。

ノンバイナリーとはちょっと違うジェンダーフルイドというのがあって、このジェンダーフルイドは常に揺れているんですね。今は男性、でも明日になったら女性になるという、何か川の流れるようにというような、その日の気持ちのままに女性や男性になったり、中性にもなったりします。それをジェンダーフルイドと言います。最近、若い人の間で増えています。

多様な性、アイデンティティを話しましたが、それプラス、まだまだ続いていくということですね。LGBTQ、手話ではこういうふうには「L」と「いろいろ」と表します。素敵な手話表現だと思っています。

ろうLGBTQを支援する活動を始めて十年ぐらいになりますけど、十年前はLGBTというところまででした。Qはなかったです。LGBTがやっと知られ出した頃でした。LGBTという手話がまだ決まっていなくて、一つ一つ表すのが大変なので何か手話表現をつくろうよということになりました。最初はこういうふうには「L」と「人々」という手話をしていました。

通訳者が「L」と「人々」と続けて表すのも何か大変、ということ、また新しくこのような手話に「L」と「いろいろ」という手話表現に決まりました。日本語も時代の流れで変化すると同じように、手話もどんどん変化していきます。手話も生き物です。社会の背景や状況に影響されながら、手話も変わっていきます。それは良いことだと思っています。

海外で活動していく中で、日本の「LGBTQ」の手話表現が素晴らしいということで海外でも使われるようになりました。日本手話やアメリカ手話以外にも全世界で共通する手話で国際手話というのがありますけれども、国際手話にも日本の「LGBTQ」の手話表現が使われるようになり、すごくうれしいです。

日本では、人口約一億二千万人ぐらいだと思いますが、二〇二〇年に世論調査したところ、人口の八・一%、LGBTQの方がいらっしゃるの結果がわかりました。四年前の調査ではLGBTQだなどという人の数が、中には言えないと黙っている人もいらっしゃいます。そういう人たちの数を含めたらもっと割合が多くなると思います。十三人に一人の方がLGBTQ+であるということです。遠い世界の話と思わないでください。皆さんの身近に、友達とか家族の中にもいらっしゃるかもしれません。そのぐらい身近にいると思っていただければと思います。

大阪市の調べでは、大阪市内の人口の十六・八%が異性愛者以外という結果でした。いろいろな地域の行政も調べていらっしゃいます。

血液型がありますよね。血液型に例えると、AB型の数と同じぐらい、左利きの方と同じぐら

いの人口の方がLGBTQの方ですということ。

話は変わりますが、今はLGBTQの方で自分でアイデンティティを公表している方が増えていると思います。可視化されてきていると思います。テレビに出ている方で、LGBTQに関する自分の経験を話されたりする方も増えています。芸能界の中で、自分の性を公表している人がいらっしやいます。皆さん有名な方なので知っていると思います。まずは歌手の宇多田ヒカルさん。歌手の方です。この方はノンバイナリーを公表されています。男性でも女性でもないし、その枠組みから外れているということ。マッコデラックスさんはすごくよくテレビに出られています。この方が誤解されやすいのは、見た目は女性、服装とかは女性ということでトランスジェンダーかと思われそうですが、この方はゲイです。服装は趣味で女性の服を着られている方です。はるな愛さんは皆さんご存じだと思います。この方はトランスジェンダーです。元男性です。性適合手術を受けて、男性から女性になった方です。りゅうちえるさん。この方は亡くなつて本当に残念ですけれども、トランスジェンダーです。トランスジェンダーになる途中で亡くなられました。原因はいろいろとあって、一番大きな原因がSNSですごく大きいじめを受けました。誹謗中傷をいっぱいされて、それがきっかけだったのかなと。結婚されて子どもが生まれた後、トランスジェンダーということで、そんなことはおかしいとかいう批判がすごくあって亡くなられました。水川きよしさん。去年か今年か、NHKの紅白歌合戦に参加されましたね。とても美しいお姿でした。ジェンダーレスの方です。本人がそのように公表されています。男性

でも女性でもない性だということです。

そのように、日本もようやく有名な方がLGBTQであると公表されるようになってきています。海外でも同じです。アメリカの場合は八十%ぐらいがLGBTQといわれており、アップルの社長のクックさんという方もゲイだと公表されています。また、経営者の人もLGBTQをカミングアウトされている方が多いです。LGBTQに関する活動もされています。

こちらの映像は、実際にアメリカの小学校低学年の子に教えている内容ですけれども、自分の性自認や性指向を知ろう、そういう教材です。ジェンダーブレッドといいます。ちょっと見にくいですが、一番上に身体の性、その下のグラフが心の性、心の性の下に服装などの社会的外見です。外見の下に、性指向です。このように五つのグラフがあります。男性・女性だけではなくて、アメリカの場合は五つのグラフに分けられております。女性の部分がピンク、男性の部分が青色です。左がゼロ%で右が百%ということで、自分がどのあたりにいるのかを見ることができます。私の例ですけれども、このようになっていきます。体は女性で、男性の身体になりたいというのはありません。男性がゼロ、女性が百と私は書きます。心のほうは女性が八十かな、男性は二十かな、三十ぐらいかなということ、このようになっていきます。理由は、私が場面や状況によっては男性っぽいところもあると友人から言われるからです。見た目は女性で、スカートも履きますが、ズボンもよく履きます。女性が七十、男性が三十かなと思っています。性指向、好きな相手の性については、先ほど言いましたけれどもパンセクシュアルです。ですから、無理

に入れてしまうと男性五十、女性五十かなという感じですが。今、三時三十分点の私の好きな性指向は男性五十、女性五十です。十分後は変わっているかもしれませんが。もしかしたら全く逆になっているかもしれません。このように性自認や性指向は決めたら永遠に同じだというわけではありません。自分を見つめてみてください。このようにジェンダーブレッドから新しい発見があるかもしれません。ぜひ皆さんもやってみてくださいね。

もう一つ、補足ですけれども、性指向、好きになる相手の性ですね。これは私自身も分かったことがありますけれども、恋愛と性指向は、別だなということが分かりました。自分は女性で好きな相手は女性、レズビアンですよ。なので、恋愛は女性がいいです。でも、セックスは男性がいい方もいらっしゃいます。恋愛は女性、好きな相手は女性ですが、セックスの場合は男性がいいということもあります。本当に幅が広がってきます。

性自認は自分の性のことです。性指向は好きな相手の性を指す言葉です。SOGIという言葉があります。今、行政とか会社であったりとか、コンプライアンスにおいても結構この言葉が出てくるかと思えます。性指向、性自認という、英語の頭文字をつなぎ合わせてSOGIと言います。SOGIハラという言葉があります。セクハラとはまた別になります。相手の性指向、性自認を侮辱することを言います。分かりやすく言えば、例えば、座ったときに足を広げたりすると、「駄目よ、女の子としてちゃんと足は閉じなさい」と言われる。これはSOGIハラになります。男性が職場で失敗しちゃって泣いている。そういう方がいると上司が「男だから泣く

な」と言う。それもSOGIハラになります。そういうのがありますので皆さん気をつけてください。私の性自認はシスジェンダーですが、性指向はパンセクシュアルです。こういうふうには自身の性を分けて捉えています。

十年ぐらいあちこちでお話をさせていただいておりますけれども、「LGBTQって何」とか「何でそんなのになったの」とよく聞かれます。私は生まれつき耳が聞こえません。私にとっては自然なアイデンティティですよ。LGBTQも自然です。逆に私が聞くことがあります。「では、あなたはなぜストレートですか」とその方に聞いても、相手は答えられません。それと一緒に。LGBTQも自然なアイデンティティです。わざわざ「私、これを選ぶ」ということはしません。

男性と女性、改めて、なぜ分けないといけないのか、皆さん一度考えてみてください。普段、何気なく過ごしていると思いますけれども、トイレであったりとかお風呂であったりとか、男性や女性に分けられる場面があります。何かを申請するときも性別欄があったり、色だったり、いろいろと分けられてしまいます。そういうことが日常生活でたくさん起きています。ランドセルの色もそうです。黒だから男の子、赤は女の子、最近は前と比べたら色のバリエーションが増えてきましたよね。しかし、まだ、色で性別を分けるところもあります。スカートを履くのは女性、スカートを履くなんてという考え方も残っています。皆さん、アニメのプリキュアはご存じですか。私の職場の子どもたちに聞いたら、プリキュアは手を交差したような表現をし

す。へーと思いました。かわいいですよ。プリキュアを好きという子は女の子で男の子は駄目とか、ピンクが好きなのは女の子で男の子は駄目だよとか、男性が好きなのは女性とかそういう考え方があるのが今の社会です。実際に見てみると違いますよね。男性が好きな男性もいるし、身体が女性でも心は男性の方もいらっしゃいます。プリキュアを好きな男の子もたくさんいます。青色とか暗い色が好きな女性もたくさんいらっしゃいます。ピンクが好きな男性もいます。

今の日本の状況はどうでしょうか。同性愛は犯罪ではありません。LGBTQの方がテレビにも出ておりますし、いろいろと活動ができる状況ではありますけれども、やはり差別禁止法が日本にはないです。二〇二三年にLGBTQ理解増進法が施行され、法律でちゃんと決められましたが、LGBTQ当事者はやはり納得できていません。当事者の声が入っていません。もともと私たちが要望したのは差別禁止法です。ですけど、国は何か曖昧な表現をしているところがあります。まずは理解をお願いしたいということで、理解増進法になってしまったということです。法律の文言の中に「すべての国民が安心して生活できるように」というのがありますけれども、この「すべて」にはLGBTQに対して嫌悪感がある方も含まれています。そうすると、差別も認められるというようになってしまいます。差別はいけないんだ、とはっきりとした法律、差別禁止法をちゃんと作ってほしいです。障害者差別禁止法がありますよね。そういう意味で当事者たちは法律の中身を見直してほしいと動いています。同性婚が認められないのは違憲だとして札幌や東京、福岡高裁では判決が出ています。

先進国が集まるG7という会議がありますよね。日本もその七か国の中に入っていますが、同性婚を認めていないのは日本だけです。

五年前に同性婚を認めてほしいという裁判が始まりました。福岡とか北海道、大阪など五件です。皆さん同時に訴訟を起こしました。大阪高裁からは合憲だと判断が出ています。

最後になりますけれども、日本の場合はトランスジェンダーが性別変更をするとき、手続が本当に大変です。性同一性障害特例法というのがあります。ここまで大変なのは日本や韓国ぐらいです。本当に条件が厳しいです。条件が二十歳以上とか、結婚経験がないこと。もし離婚した後ならいいのかというと、駄目です。あとは子どもがいなか、見た目が、なりたいた性に合っていないかどうか、そういうふうに変えないといけません。女性になりたいんだったら乳房をつけないといけないとか、男性の生殖器を切らないといけないとか、性転換手術を受けないといけないです。本当に条件が厳しいです。先ほど伝えましたように、トランスジェンダーという概念は揺れる、揺れたい人も含まれています。ヨーロッパとかアメリカの一部の州の場合は、例えば、性自認が女性であれば、わざわざ手術を受けなくても性別変更ができます。日本はわざわざ手術をしないといけません。かつては優生思想の問題もありましたよね。障害者が子どもを産まないための法律、つまり、優生保護法、国は手術をずっと容認してきました。今、優生問題に関する裁判がニュースでもあるかとは思いますが。最高裁で勝訴判決が出ました。この性同一性障害特例法と共通しているところが多いように思います。

同性婚の代わりにパートナーシップ条例が各自治体で取り組まれています。今、三百二十八の自治体で、枚方でも認められていると思います。昨年は五千七百七十一組の同性カップルなども含めたカップルがパートナーシップを申請しました。その目的は、例えば、同性カップルの場合、一緒に暮らして長いですが、突然、カップルの一人が倒れて救急車で運ばれた。それを聞きつけて会いに行ったけれども病院関係者は家族ではないから面会できませんと言われます。「いやいやいや、ずっと一緒に暮らしているのに」と言っても無理なんですよね。家族という証明がないから面会させてもらえないとか、市営住宅も夫婦でないと申し込めない、異性同士が前提なので、同性同士のカップルでは申し込めないというのがあります。ほかには、事故とか病気で亡くなったときの保険金などの財産がもらえない。家族の人に取られてしまうという不具合をなくするためのパートナーシップ条例です。それが意味があるかどうかは、ある方がましというのはありますけれども。一番いいのは同性婚を認めていただくことです。異性婚と同じように同性婚を認めていただくのが一番、権利として対等だと思います。

最後になりますが、これが一番大事な話です。私はろう者プラスLGBTQ+の立場ですが、その人たちの課題は何かということを少しお話しします。

まず、ろうコミュニティの中でLGBTQ+に対する理解がないです。まだ「レズ」とか「ホモ」とか言われるような、そういう差別手話が残っています。大分、サポートブックの普及の効果もあって少なくなってきましたが、まだ差別的な手話をされようとしており、現在、啓発

を進めています。個人情報について、勝手に漏らすというのがあります。アウティングの知識がなかなかろう者自身ができなくて、つい他人が隠していることを言ってしまう。ろう者は情報障害者です。それをなくすためにろう者同士で積極的に情報共有を図ることがあります。それは良いことなのですが、情報の判断について乏しい面があるように思います。また、LGBTQに関しての専門的な言葉や手話表現が多く、通訳者自身が通訳できないことがあります。手話通訳士を目指したい方向けの講座がありますけれども、それで困ることがあります。講師から見た目が「男性だろう」という山本さんは「山本＋男性」という手話表現、「女性だろう」というのなら、「山本＋女性」という手話表現で表すように、と指導されます。見た目で「男性」「女性」とこちらで勝手に判断をしてもかまわないというわけです。実際、身体は男性だけど心は女性だという人からみれば、すごく苦痛ですよ。男女関係なく、人差し指で表現をする「ジェンダーニュートラル」な人称代名詞の手話表現があります。それを積極的に使ってほしい、指導してほしいと思っています。

日本手話の中では、男性と女性を分ける性別二元論に基づいた手話表現が多いです。例えば、「かわいい」という表現です。「女性」＋「頭を撫でる」、「男性」＋「頭を撫でる」という表現をします。男性を上げて「尊敬」、女性を上げて「尊敬」とか、そういうような表現がすごく多いです。アメリカの場合「マリッジ」、「結婚」は男女関係なく、手を合わせる形になります。また、結婚指輪をはめるという表現もあります。日本手話で「結婚」は「男性」と「女性」

をくつつける形の表現です。このような表現をするのは世界からみても日本だけです。もし、同性婚が認められるようになったら、今の「結婚」という表現は意味がなくなってしまうよね。

三つ目が、聞こえるLGBTQにも、ろうLGBTQの人に対する理解がないということもあり、手話通訳などの情報保障がなかなか準備してもらえないということがあります。年に一回、LGBTQ+映画祭の大きなイベントがありますけど、それに字幕が付与されることがありませんでした。

最後に、ろうLGBTQのための相談する場所がまだ乏しいです。最近では行政が窓口を作るなど増えてきていますが、ほとんどが電話相談なので、ろう者は相談がしにくいです。メールや手話通訳者を介しての対面式など、ろうLGBTQ者も使えるように働きかけています。

ろうLGBTQの場合は、ろう者としての問題とLGBTQとしての問題が重複しています。それにプラス、ろうLGBTQ独自の問題もあります。

紆余曲折してしまいましたが、これから友達や家族、また新しく出会う人の中に「私、実はLGBTQなんだ」とカミングアウトされることもあると思います。そのときにどうしたらいいかというところで、それを聞いたときにどういう対応をするかを心がけてほしいです。

「私は男性だけど、好きな人も男性だよ」と言われたら、「あなたはゲイね」とセクシュアリティを決めてしまうのではなく、最後まで話を聞いてあげてください。その人は覚悟を決めてカ

ミングアウトされていると思うので、共感することが大事です。それと、「何か困ったことはある？」と聞いてみてください。今、言われた内容は他の人には言わないほうがいいよね、と確認してください。アウトイング防止のために必要なことです。「ああ、そうなんだ」で終わってしまふこともあるかもしれないですけど、何かわかれば情報提供してあげるとか、意見交換するか、そういう良い関係をつくっていただければと思います。

こちらはホームページです。手話表現や言葉の意味など、三冊目まで出ているろうLGBTQのサポートブックがホームページからダウンロードできますので、自由に活用していただければと思います。

これで私の話は終わります。どうもありがとうございました。

(拍手)

○司会 山本美由美さん、ご講演ありがとうございます。

それでは、少し時間がございますので、皆さんのご質問をお受けしたいと思います。ご質問のある方はマイクをお持ちいたしますので、挙手をお願いいたします。

○質問者A 自民党の総裁選が今度ありますよね。総裁選のテーマの中の一つで、「夫婦別姓について」、それはLGBTQに対して影響があるのだろうかということをお聞きしたいです。

○山本 美由美 もうすぐ自民党の総裁選がありますね。もう本当に明日、明後日ぐらいに決まるんですね。夫婦別姓が焦点になっています。意見もいろいろあると思いますけど、それにつ

いてLGBTQに影響があるかどうかですが、もともと別姓は男女差別という考え方があって思っています。自民党はもとも保守的なので、やはり男女差別意識が強いです。家父長制と言いますが、男性優位の歴史が長いのです。あまり聞きなれないかもしれませんが、もともとそういう感じですね。その問題とLGBTQにはやはり影響があるのではないかと思えますけれども、とにかく期待はできないと思います。G7で日本が同性婚を認めないとお話したように、今は日本は焦っています。日本は国民に同性婚に対してどう思っていますかと聞いています。結局八十%は賛成。一般の国民に同性婚は「反対か賛成、どっちか」と聞いたら、結果は八十三%ぐらいは「いいんじゃない」と賛成はしています。それなのに、国は駄目だと認めていないのです。だから、一部の反対で認められていない状況です。国は変えたくないという思いがあるので、岸田元首相は「同性婚を認めたら社会が変わってしまう」と言いました。それを聞かれたことはありますか。認めてしまえば社会は変わるとか、変わってしまうという言い方を、マイナスになるというイメージの言い方をされたんです。そういう考え方の人が多いので、そこから変えていかないといけないんじゃないかなと思います。

○質問者B 私、耳が聞こえませんが、よろしくお願いします。

お話を聞きまして、日本には人口一億二千万人いますよね。八・九%LGBTの方がいらっしゃるのことで、耳の聞こえないろうあ者はどれぐらいの割合でいらっしゃるのでしょうか。

○山本 芙由美 すごくいい質問だと思います。実際、私も調べたんです。身体障害者手帳の中で聴覚障害者は何人いるの、難聴・聴覚障害者、それを含めて手帳を持っている方々が、聴覚障害者の人口の八％で計算をしますと、きちんと確認したわけではないですけども二千ぐらいいるのではないかなと思います。聴覚障害者もいろいろなアイデンティティを持っていらっしやいます。ろう者であったり難聴者、中途失聴であったりとかです。大体それぐらいの割合ではないかなと思います。実際、ろう学校から講演依頼が増えています。ろう児にも自分の性で揺れている子が多いです。

○質問者B もう一つ質問したいんですけれども、結婚とかついつい、僕は日本手話をやっちゃいます。実際も同性婚もありますよという情報提供をしていただければすごくうれしいなと思います。

結婚という手話ですね。ごめんなさい。ついついやっちゃうんですけれども、これからちょっと気をつけていきたいなと思っております。

○山本 芙由美 気づいていただいただけでも、私、すごくうれしいです。ありがとうございます。手話もやはり時代によって変わっていくんですね。大事なことだと思います。ありがとうございます。ございました。

○質問者C 今、結婚の手話で話されていますけれども。

○山本 芙由美 すみません。補足ですけれども、手話の話ですが、日本で一番大きいろう者の

組織があります。そこで新しい手話を作っているんですね。通訳者養成もしています。それに関わる本も発行されてまして、「LGBTQ」の手話も二〇二〇年に載りました。「ゲイ」や「レズビアン」も載りましたので、それをどんどん普及していただいておりますし、内容も今後変わっていくのではないかととても期待しております。

○質問者D 最近、LGBTQ+のいろいろな問題について、テレビでニュースを見ることがありますけれども、最近ちょっと二、三見た中で、もともと女性だった人が男性になりたくて、トランスジェンダーです。だけどその人はゲイ、一緒に暮らしている方も男性だからゲイ。だけど、最近だったかな、ニュースで、もともと男性だった人が女性になりたい。先ほどお話があったように、トランスジェンダー、戸籍を変えようと思うといわゆる大きな手術をしなければならぬという大きな壁があって、だけどそのテレビで見たニュースによると、女性になりたい男性、胸はつくられたようですけども、いわゆる性器はそのまま。手術をすることは非常に体に負担になるので、それは憲法違反でないかという判断が下りたようなニュースを見ました。そうすると、私が見たニュースの幾つかの中で、一緒に暮らしている方が男性。その人はゲイですけども、男性になりたい女性、だけどいわゆる子宮は持ったまま、子どもが欲しいのでいわゆるセックスをして子どもが生まれた。だけども、ちょっと頭がこんがらがりますけれども、そうすると、子どもを産んだ人もいわゆる男性ですから、男性になることを希

望したから男性ですよ。だからどっちもお父さん。これからそういうことが増えてくると、お父さんとかお母さんという概念、お父さんとは、お母さんとはという概念がちょっと変わってくるのかなと思います。私は昭和生まれの人間なので非常に頭が固くて、いろいろなニュースを見て理解しようとは思いますが、頭がまだまだついていけない部分がたくさんあって、いろいろな人がいるというのは理解ができて、そうなんだなと思いますけど、ニュースを見ると、お父さん、お母さんという概念がどうなってるんだろかという疑問を持つことがあります。山本さんはどう思われますか。

○山本 美由美 ありがとうございます。私も昭和生まれです。でも、勉強をして来てくださったこと、本当に感謝しております。やはり今の話、憲法違反の話もそうですけれども、北海道の裁判の話ですよ。北海道だったかなと思いますけれども、裁判では憲法違反と出ました。行政は何も動かない。「ああ、憲法違反、そうなんだ」で終わっています。判決に対して、国は動こうとしないです。そこが問題だと思います。立法と行政が別のものになっていきます。立法もそういうところおかしいよとか、こういう法律を削除するか声を上げてほしいです。優生の問題もそうですよね。旧優生保護法がありました。一九四八年から一九九六年までずっと、私は一九八一年に生まれましたけれども、ずっとこの法律がありました。障害者が子どもを産むのは駄目だと、それを本人に言わないまま子どもを産めない身体にしまったと、そういうことがあります。盲腸の手術をするよと騙されて、実際には子宮を取られてし

まったとか、そういうことがたくさんありました。結果、一万六千人の方が手術を受けさせられたんです。最高裁にいきまして、憲法違反になるということで裁判官の全員一致で決まりました。裁判官全員が違反だと、そう判断しました。報われたと思います。でも、国は動かないです。岸田元首相、実際に謝罪をしましたよね。しかし、その後全く動いてないです。形だけです。北海道の話もそうです。日本の行政システムはおかしいですよ。日本は性別二元論が根強い国です。ですから、どっちかに決めてください、手術を受けてくださいということなんです。血縁とか、きれいな血を残したい、つまり、純血、そういう歴史が続いてきたため、そういうふうに続けたい、残したいという考え方があります。

先ほどお話ししたアメリカでの話になりますけれども、例えば、ゲイ同士の方が結婚され、子どもが生まれました。パパが二人いる、ママが二人いるという、そういうわざわざ「お父さん」「お母さん」とかは言いません。子どもたちはパパが二人いると受け入れています。子どもにもアイデンティティがあります。僕にはパパが二人いると子どもも自然にアイデンティティを獲得します。これは教育です。先ほどのジェンダーブレッドのように、それを教えていると、「ああ、性自認や性指向にもいろいろあるんだな」とこの子どもは学びます。多くのロールモデルを見る、出会う機会があります。ですから、多様な人がいるんだというのも子どもの頃からずっと学んできています。そうすると多様性を受け入れることができる。日本にもいろいろな立場の方がいらっしゃいますよね。ロールモデルがもっともっと、どんどん出てきていた

だきたいなと思います。そうすると、子どもたちも受け入れやすいかと思います。

○司会　ありがとうございます。それでは、本当にお忙しい中、本日ご講演いただきました山本芙由美さんに、もう一度大きな拍手をお願いいたします。

(拍手)

○司会　ありがとうございます。それでは、これで本日の講演を終了させていただきます。

